

日本音楽理論研究会第 40 回例会のお知らせ

日本音楽理論研究会は、コロナ禍のため 2020 年は休止しましたが、2021 年からオンライン例会にチャレンジしました。こうした活動を継続することは非常に意義あることと考え、本年度例会もオンライン例会を開催いたします。奮ってご参加ください。

◆◆◆ 日本音楽理論研究会第 40 回例会 ◆◆◆

日時： 2023 年 5 月 14 日(日) 12:00-17:00 Zoom によるオンライン開催

参加方法: dolcecanto2003jp@yahoo.co.jp に、以下の内容のメールを送信された方に Zoom の URL を返信いたします。

- ・メールのタイトルに、「日本音楽理論研究会第 40 回例会参加希望」とご記入ください。(メールの見落としを防ぐために)
- ・メールの内容に、「お名前、所属(があれば)、メールアドレス」をご記入ください。
- ・初参加の方は、簡単な自己紹介、およびどのように本研究会をお知りになったか必ずご記入ください。
- ・申し込み期限: 2023 年 5 月 13 日(土)23 時(日本時間)厳守でお願いいたします。

参加費: オンライン開催のため、引き続き無料とします。

※ 注意:

- ・Zoom の接続に関しては、こちらではサポートできません。
- ・途中参加および途中退会は自由です。
- ・質疑応答時に発言希望される方は、チャットに「お名前」を書きこんでください。

時間の許す限り、司会から指名させていただきます。

なお、発言は 1 分以内で簡潔にお願いいたします。

◆ プログラム ◆

※ 原則として、発表者一人の持ち時間は 30 分発表・20 分質疑応答。10 分の休憩を経て次の発表に入ります。

※ 以下におよその時間配分を記載していますが、流れによって大幅に変更される可能性があります。

※ 例会の発表内容は後日、「日本音楽理論研究会通信」(2023 年 8 月発行予定)で報告予定です。

開会 (12:00-)

★ 発表 1 (12:00-)

見上潤: いわゆる「1908 年問題」について —スクリャービンおよび新ウィーン楽派における調的スペクトラムの比較分析—

無調性とは何か?なぜ発生したのか?いかに分析するか?という観点から音楽史をたどると、1908 年あたりに何かを踏み越えていく直感を得た。柴田南雄『西洋音楽史 印象派以後』(1967)によれば、まさに第 1 次世界大戦前夜の白熱した時代の起点となる年だった。この書にしたがって、まずはこの時代にヴァーグナー以降の作曲家がいかに関わったのかを問い、そして中世からヴェルディまでの半音階の系譜(クロマティズム)についても歴史的に鳥瞰にした。音楽理論の観点からみれば、無調性およびクロマティズムとは古典的和声法からの逸脱と言えるが、それは音楽史のどの時代にも存在していたし、近代における変化・変遷も漸次的であって、調性と無調性の間には境界線を引くことは困難である。ここからこれらの現象全体を、調的スペクトラム(Spectrum=連続体)としてとらえることを提起した。この一連の現象に関して、すでにドビュシー、ラヴェルまで射程に収めた島岡ゆれ理論(1998)をどこまで拡張・応用しうるか、さらに PC セット理論やオトゲノム理論の有効性を引き続き問う。

本発表は、スクリャービン《ピアノソナタ第 5 番》Op.53(1907)から《ピアノソナタ第 6 番》Op.62(1911)、シェーンベルク《室内交響曲第 1 番ホ長調》Op.9(1906)から《歌曲集『架空庭園の書』》Op.15(1909)、ヴェーベルン《パッサカリヤ》Op.1(1908)から『第 7 の環』による 5 つの歌曲》Op.3(1909)、ベルク《ピアノソナタ》Op.1(1908)から《弦楽四重奏曲》Op.3(1910)を分析対象にする。分析の指標として、調号の使用法とその使用の放棄、開始部分および終止部分の和声に着目した。これらの作曲家がほぼ同時期に似たような経過を経て作風を変えていったことは興味深い。

★ 発表 2 (13:00-)

川本聡胤: PC セット理論(5) ~セット間の諸関係~

無調音楽を中心とした音楽の分析に用いられる PC セット理論について紹介するシリーズの第 5 回目は、PC セットどうしの間にみられるさまざまな関係について概観する。

PC セット理論を学びかけた者はともすると、セットの名称を見出しただけで満足してしまいがちである。少し進んで学んだ者でさえも、セット間の移置関係と転回関係、そしてセットクラスの名前の理解までにとどまりがちである。たしかにそこまで理解することでみえてくる音楽のエッセンスもあるが、見いだされたさまざまなセットどうし、あるいはセットクラスどうしの間に、どのような関係があるのか、近い関係なのか、遠い関係なのか、それはどういう意味においてか、などといったことについて詳しく考察を加えていくことで、はじめて見えてくる、より音楽的な意味というものがあるのもまた確かである。古典音楽の分析に例えて言うならば、和音 1 つ 1 つにローマ数字を付してそれで満足してしまう初学者もいるが、このローマ数字で分析された和音どうしの関係性や和音から和音への進行に着目していくことで、より音楽的な意味が理解出来ることに似ているかもしれない。無調音楽においても、さまざまな PC セットどうしが無秩序に並んでいるわけではない。そこにはなんらかの関係性があり、曲によっては何らかの法則に従っていることさえあるのであり、それこそが音楽的に重要な意味を持つのである。

本発表では、セット間のさまざまな関係性に着目し、それぞれの意味を解明していく。特に、セット間の共通音の数による関係について、詳細に検討する。この際、個々のセットにおける音程ベクターとの関連に触れていく。また移置レベルや転回レベルが共通音数にどのような影響を及ぼすのかについても明らかにしていく。さらに「Z 関係」、「包含関係」、「補完関係」とそれぞれ呼ばれる関係性についても、時間の許す限り触れていきたい。

★ 発表 3 (14:00-)

小栗舞花: 音楽における「Group Creativity」の考え方 -音楽心理学、音楽教育、音楽療法の先行研究から-

音楽の創造は、あらかじめ個人が何かを設計することに限定されない。そうではない形のひとつに、集団で同時進行的に進められる創造のあり方がある。前者は作曲家があらかじめスコアを書き起こすやり方であるし、後者は即興アンサンブルのような集団によるその場で生成されていく音楽が該当する。後者には、コミュニケーションや相互作用、交渉といった個人では行えない営みが深く関わっている。こうした複数人での協同的で即興的な創造性を「Group Creativity」と呼ぶ。

「Group Creativity」に関する研究は、主に音楽心理学、音楽教育、音楽療法の分野で発展していて、研究対象はもっぱら複数人での即興アンサンブルを扱っている。この場合の即興アンサンブルは、必ずしも舞台上演を目的にしたものに限らない。むしろ、観客のいない空間で行われるセッションや、教育や療法の現場で行われるセッションなど、インフォーマルな性質を持つものを多く対象としている。

本発表では、まず「Group Creativity」というキーワードを用いて研究が行われている研究を 2 つ紹介する。1 つ目は、R. K. ソーヤーの「Group Creativity」5 つの特徴、2 つ目は R. マクドナルド、G. ウィルソンの即興演奏における個人の意思決定のためのモデルと各奏者間の理解不一致状態である。その後、「Group Creativity」というキーワードは使われていないものの、即興アンサンブルを対象とした研究のうち、複数人での共創による音楽創造の仕組みを見出しているものを複数紹介する。最後に、それぞれの理論を比較検討し、理論整理を行う。

★ 発表 4 (15:00-)

川崎瑞穂: 「相同性 homologie」のススメ—supercell《君の知らない物語》を事例として—

クロード・レヴィ=ストロースと音楽との関係について、とりわけ「相同性」に着目して考察しているのがジャン=ジャック・ナティエの『レヴィ=ストロースと音楽』(添田里子訳 2013 アルテスパブリッシング (Jean-Jacques Nattiez. 2008. *Levi-Strauss musicien: essai sur la tentation homologique*. Arles: Actes Sud.)) であるが、レヴィ=ストロースがいう「相同性」の意味を理解するのは難しい。というのも、他にもなく彼自身が、「対称、逆転、等価、相同、同形性……などの術語にわたしが与えている意味がルーズであることは、誰よりもわたしが自覚している」(早水洋太郎訳 2006 『神話論理 I 生のもとの火を通したもの』みすず書房、p.46 (Claude Lévi-Strauss. 1964. *Mythologiques 1. Le Cru et le Cuit*. Paris: Librairie Plon.)) と認めているからである。ただ、ごく単純に言えば、単なる要素同士の「類似性」ではなく、二項対立同士の「差異」(関係)の「類似性」のことを意味しているということができる。

本発表では、この相同性という発想に基づき、2009 年に supercell が発表した 1 枚目のメジャー・デビューシングル《君の知らない物語》を分析する。アニメ『化物語』(2009)のエンディングテーマとしても知られる楽曲であるが、とりわけ今回検討するのは、この作品の「物語的展開」である。楽曲の形式については様々な解釈が可能であるが、とりあえずは「イントロ (歌詞あり)」「A メロ」「B メロ」「サビ」「A メロ」「B メロ」「サビ」「C メロ」「間奏」「D メロ」「サビ」としておく。本発表では C メロから間奏を経て D メロへと至る過程が、物語をどのように音によって表現しているかに注目する。特に C メロにおける歌詞 (言語) と旋律 (音) の関係、D メロにおける四つの旋律と各歌詞内容との相同性に着目し、当該楽曲の描く物語が、音との相同性によって描かれていることを指摘する。そして、相同性に着目した楽曲分析の可能性について考察する。

★ ラウンドテーブル (16:00-17:00)

***** 今後の例会の予定(発表者募集中) *****

※ 注意: 日程・時間・内容等、変更になる場合がありますので、最新情報はホームページでご確認ください。

★ 第 41 回例会 2023 年 10 月 1 日(日) 詳細未定

★ 第 42 回例会 2024 年 5 月 19 日(日) 詳細未定

日本音楽理論研究会事務局(本部) Secretariat of THE SOCIETY FOR MUSIC THEORY OF JAPAN

HP: <http://sound.jp/mts/> TEL &FAX: 097-545-4374 Email: endo@oita-pjc.ac.jp

〒870-0833 大分市上野丘東 1-11 大分県立芸術文化短期大学音楽科 遠藤研究室気付

日本音楽理論研究会東京事務局 Tokyo office of THE SOCIETY FOR MUSIC THEORY OF JAPAN

Email: dolcecanto2003jp@yahoo.co.jp (見上潤 Mikami Jun)
